

“軟らかい”活用と“硬い”活用

坪井美樹

キーワード：母音変化型活用、語尾添加型活用、意志・推量の助動詞ヨウ、完了の助動詞リ、動詞音便形

要 旨

日本語動詞活用において、母音変化型活用〔四(五)段活用〕は後接する接辞類と融合する傾向を示し、語尾添加型活用〔一段活用、二段活用〕は逆に後接する接辞類と融合しようとせず、自らの語形を固定的に維持しようとする。この傾向は日本語史上、動詞・助動詞の形態や接続に関する変化の幾つかに、その変化の方向を決定する力として働いている。助動詞ウからヨウが分出される理由、完了の助動詞リ・タリの変遷、動詞連用形音便形が母音変化型活用動詞にしか生まれなかった理由など、いずれもこの動詞活用型の持つ性質の現れとして説明することができる。

0. はじめに

- a. 完了の助動詞リの衰滅とタリの発達(完了の助動詞リはなぜ衰滅したか?)
- b. 動詞連用形における音便形の有無(語尾添加型活用動詞連用形になぜ音便形が生じなかったか?)
- c. 意志・推量の助動詞ヨウの成立(この助動詞はなぜ二つの異形態を持つのか?)

本稿では、一見全く別々な文法史上の出来事と思える上記三つの諸事象(より問題提起的に示すとしたら、括弧内に記したような疑問文の形で示される問題)について、そのいずれもの事象に、母音変化型活用動詞の〈接辞類^{*1}と融合^{*2}しようとする性質〉と、語尾添加型活用動詞の〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉が働いているという解釈を示したい。そして、この観点から、括弧内に掲げた疑問にも部分的にはあるが答えることが出来るものとする。両活

用型動詞に見られるこの性質は、少なくとも文献に例証を見いだせる古代以来現代に至るまで、両活用型動詞に一貫した性質であると言えることができる。比喩的な言い方を用いれば、母音変化型活用は後続の接辞と融合しやすい“軟らかい”活用であり、それに対して語尾添加型活用は“硬い”活用と言えるのである。

なお、本稿では、いわゆる混合変化型活用動詞(二段活用型動詞)も、語尾添加型活用動詞として論ずる^{*3}。当該活用型動詞がその活用による形態変化に母音変化を含むとは言っても、その性質が母音変化型活用動詞とは対極的なものであることは論を進める過程で明らかとなるであろう。

さて、前ページに示したa~cは、当該事象の発生(成立)をほぼ時代順に並べたものであるが、本稿の論述の順序は、時代順にこだわらず、本稿の筆者の主張がよりわかりやすいような順序で議論を進めたい。まず、その形態の成立の経過が明確であり、形態音韻論的な議論の対象として好適な意志・推量の助動詞ヨウのケースの検討から始める。

1. 助動詞ヨウの成立

意志・推量の助動詞ウ・ヨウ^{*4}は、母音変化型活用動詞にはウ、語尾添加型活用動詞にはヨウが接続するという分布を示す。室町時代末期には意志・推量の助動詞ウズの異形態にもヨウズの形が見られる。その初期の例が、

矢をも一つ射ようずる (天草本平家物語 卷一 第六 p. 43)

のような単音節語幹動詞(射る)に接続する例から見始めることから、その成立の理由は、上の「射ようずる」の例で言えば、

i + u z u → y u : z u

のような拗長音形が、動詞語幹を破壊する形として嫌われ、動詞語幹を保存する近似的な形として

i y o : z u

という形が選択されたものと解釈される。

助動詞ヨウも上のヨウズと同じ事情で生まれ、これが単音節語幹動詞以外の全ての語尾添加型活用動詞に類推の結果広がったものと解釈されている^{*5}。なお、ウが

上一・二段動詞に付く場合には本来「見う(>ミュウ)」「落ちう(>オチュウ)」のようにウ段拗長音になるはずなのに、なぜ他ならぬヨウの形に安定したのかは、次のように考えられる。

即ち、助動詞ウが上一・二段動詞未然形に接続する場合と下一・二段動詞未然形に接続する場合とは異なる母音連続が生じたのであるが、

(上一・二段動詞)～i + u → ～y u :

(下一・二段動詞)～e + u → ～y o :

このままそれぞれの動詞未然形が切り離される形をとったとしたら、

(上一・二段動詞)～y u : → ～i + y u :

(下一・二段動詞)～y o : → ～e + y o :

となって、ユウ・ヨウ二つの語形が生まれることになる。しかし、このような“多様すぎる”異形態の併存は回避され、二つの語形のうち、母音変化型活用動詞にウが接続する場合に生じたオ段開長音形により近似的なヨウが選択されたものと解釈できる⁴⁶。

しかし、そもそも単音節語幹動詞において動詞語幹保存のために生じたヨウが、なぜ全ての語尾添加型活用動詞に類推をもって広がったのだろうか？ もし、語尾添加型活用動詞に単音節語幹動詞が存在しなかったとしたら、「起きゅう(または、起きょう)」とか「受きょう」とかいう形で安定していたのだろうか？ そう考えるよりも、そもそも、

o k i + u → o k y u :

u k e + u → u k y o :

となること自体がそれぞれの動詞の形態の破壊(「語幹の破壊」ではなく)として嫌われたのだと考えたほうがよいのではないだろうか？ 助動詞ヨウが定着するについて、単音節動詞の場合から多音節動詞の場合への「類推」は必要なかったのではないだろうか？

もちろん、助動詞ムがウとなり、音声言語において接続する動詞活用語尾との間で長音化して発音されるようになったのは、ヨウが確立するよりもかなり古いことと考えられる。「源氏物語」の次の例は、猫の鳴き声の擬声語「ねうねう」に「寝よう寝よう」の意を聞きなしていることが古くから指摘されている。

いといたく眺めて端近く寄り臥し給へるに、来て、ねうねうと、いとらうたげに鳴けば、かき撫でて、「うたてもすすむかな」とほほ笑まる。

(【源氏物語】若菜下)

このような聞きなしが可能だったということは、当時から既に意志・推量の助動詞が「寝む(n e - m u)」の形を脱してオ段拗長音に近い形で発音されることがあったことをうかがわせる。それに対して助動詞ヨウが確立する(即ち、語尾添加型活用動詞には必ずヨウが接続するようになる)のは近世もかなり遅くなったのである(東国方言では比較的ヨウの確立が早かったようである*)。したがって、語尾添加型活用動詞にウが接続する場合に生じる拗長音形が動詞形態の破壊として嫌われ、助動詞ヨウが生まれた、と言っても、それは全体としては緩慢に推移した変遷だと言えるだろう。

母音変化型活用動詞にウが接続したものは、早く動詞活用語尾と助詞との融合が進んで、オ段開長音形を生んだ。これも融合の結果生まれた臨時的な形(オ段長音の開合の別は、そのような二種の区別を持たない短母音との間に体系の不均衡を生んだのである)を近世に入って修正するが、それは、語尾添加型活用動詞の場合のように本来の動詞語形を復元し助動詞側に新しい語形を分出せしめるという方略ではなく、融合は融合のままにオ段長音の開合の別を解消し、融合形自体を本来の5母音の音韻体系に合わせる形で安定させるという方略をとった。そして、その結果として四段活用は母音オをも自らの母音変化の系列の中に含み込んだ五段活用となったのである。

このような、語尾添加型活用動詞がその語形を固定化しようとし、接辞類との融合を嫌う傾向と、それとは対照的に母音変化型活用動詞が接辞類と融合しやすく、融合した形のままで安定していこうとする傾向というものは、あらゆる時代を通じてうかがえるのではないか、というのが本稿の筆者の考えである。ただし、語尾添加型活用動詞に接続する場合と母音変化型活用動詞に接続する場合とで語形を異にする助動詞のうち、語形変化の流れの過程が一応実証でき、形態音韻論的な説明が可能なのはウ・ヨウのみであり、ル・ラル(ユ・ラユ)、ス・サスのような古代の助動詞もウ・ヨウと同様な方法で説明できるかどうかは疑問である。これら古代の助動詞については、最後に触れることとし、次節では完了の助動詞りの衰滅とタリの発達について論ずる。

2. 完了の助動詞リはなぜ衰滅したか？

通常、実際に生まれ出た語についてはその成り立ちに関心が持たれ細かく考察が加えられるが、生まれ出なかった語については余り関心が持たれず、その語がなぜ、どうして生まれ出ることがなかったのかは論じられる事が少ない。これは当たり前なことであろう。むやみにありもしない新語や新語形などを想定してなぜそれが実際に使われなかったのかと問うてもむなしだけである。しかし、一度は生まれ出ながら衰滅していった語について、その衰滅や他の語への交替の理由を知るために、それがなぜ新たな適応形を生むことなく衰滅していったのかを考え、その生き残りの可能性を仮想し点検してみることは時として有益であろうと考える。

完了の助動詞リも衰滅した助動詞の一つであるが、この助動詞の場合、平安時代に同じ完了の助動詞タリと明確な機能分担を持つことなく、タリに押されるかたちで衰滅していく⁴⁸。この理由は何であろうか？この疑問に正面切って答えるような先行研究が今まで無かったのは、必ずしもこれまでの研究が問題を見逃していた訳ではなく、むしろ、完了の助動詞リの成立の事情からする次のような解釈が暗黙の了解事項になっていたせいだと思われる。

即ち、完了の助動詞リは、もともと「四段活用型動詞連用形+ラ変動詞アリ」のAspect表現形式から生まれたもので、元来、存在範囲が狭い⁴⁹。このような一部の動詞にしか接続できないような助動詞リが衰滅するのは当然である。それに対してタリは、もともと「動詞連用形+接続助詞テ+ラ変動詞アリ」のAspect表現形式から生まれたもので、元来、全ての活用型の動詞に接続することができ、Aspect表現形式として同じアリを含みつつ（つまりAspect表現としての機能は共通）、リよりも汎用性が高い。このようなタリがリを圧倒するのも当然である。

上に述べたことは、リが衰滅した理由として誤りではないだろう。しかし、その成立において適用範囲に制限があるから、その衰滅も当然と考えるのは、言語の歴史の変遷のあり方を考える場合には短絡的思考だと言える。現在のいわゆる「ラ抜き言葉」も、元来五段活用型動詞にのみ成立した言語形式が他の活用型の動詞にまで適用範囲を広げる動きに他ならない。したがって、完了の助動詞リも、なぜその適用範囲を広げることができなかったのかをもう一遍問うてみる意味は充分ある。

いわゆる「ラ抜き言葉」は、母音変化型活用動詞（五段活用型動詞）語尾における、次のような、可能動詞語尾との形態的対応が、

～u → ～eru（書く→書ける）

語尾添加型活用動詞(一段活用型動詞)にも類推されて生まれたものと解釈されている。

～ru → ～reru (起きる→起きれる、受ける→受けれる)

同様に、上代の音韻体系が崩れた段階で、完了の助動詞りが、母音変化型活用動詞(四段活用型動詞)における次のような形態的対応のもとに、

～u → ～eri (書く→書けり)

語尾添加型活用動詞(一段活用型動詞・二段活用型動詞)等に類推が及んで、

～u → ～eri (起く→起けり、受く→受けり)

のようなアスペクト表現形式が生まれても良かったのではなかろうか?*¹⁰ あるいはまた、母音変化型活用動詞の活用形を(後世の国学者たちがそう分析したように)

～e(已然形) + ri(助動詞)

と捉え、これを語尾添加型活用動詞已然形にも適用させ、

～ure(已然形活用語尾) + ri (起くれり、受くれり、の形)

のような類推形を生んでも良かったのではないだろうか?

しかし、上のような類推形式が平安時代に生まれることはなかった。語尾添加型活用動詞は自らに接続する助動詞りにではなくタリを選んだのである。もし上に想定したような類推形が生まれたとしたら、それぞれの活用における語形変化系列に不都合が生じた可能性も高い。例えば、上二段活用に、「起(お)けり」のように、助動詞りを抽出した場合に「おけ」という上二段活用の形態変化系列からはみ出す妙な形が生じることになってしまうことなどもその一つである。

ところで、完了の助動詞りとは、元来「四段活用型動詞連用形+ラ変動詞アリ」の結び付きが、四段活用型動詞連用形活用語尾母音i甲とラ変動詞アリの頭子音aの母音融合を起こして、

i甲 + a → e甲

となった結果生まれたものである。これから言えば、語尾添加型活用動詞(一段活用型動詞・二段活用型動詞)においても、その連用形にアリが融合してアスペクト

表現形式が誕生しても良かったはずである。しかし、そうはならなかった理由は次のように考えられる。即ち、単音節動詞の語尾添加型活用動詞（一段活用型動詞）の場合は、例えば「見る」ならば、

mi 甲 + ari → me 甲 ri

となって、動詞の姿がその identity を失うほどに変わってしまうためにこの融合は避けられてしまった。また、その他の語尾添加型活用動詞（二段活用型動詞）の場合は、

～ i 乙(マタハ e 乙) + ari

の母音連続が、母音融合を起こさずに、しかも上代日本語において嫌われた母音連続をそのまま存続させることもできず、結局テを介在させて、

～ i 乙(マタハ e 乙)+ te + ari → ～ i 乙(マタハ e 乙)+ $tari$

の形、つまり、助動詞タリを接続させる形で落ち着いたわけである。

上の説明のもっともらしさは、上代のいわゆる音韻法則との整合性によるところが大きい。しかし、母音融合が出来にくければ、母音を脱落させることによって母音連続を回避することも出来たはずである。ここに、この問題を単に上代の音韻法則や平安時代の類推の不都合からだけでは考えることができないのではないかという疑いが生まれる。

本稿の筆者は次のように考える。元来存在を表す動詞アリが、アスペクト表現形式として助動詞化し、動詞と一単位化したことを形態的に表すためにはアリという語形を毀損する必要があった。アリが母音変化型活用動詞に付く場合は、母音変化型活用動詞の〈接辞類と融合しようとする性質〉に添い、

～ i 甲(母音変化型活用動詞連用形) + ari → ～ e 甲 ri

という形を生んだ。そして、これは、一単位中に母音連続を許さないという上代のいわゆる「音結合法則」にも違背しないものであった。しかし、〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉を持つ語尾添加型活用動詞に接続する場合は、動詞の語形を毀損せず、かつ、アリの語形を毀損する方略として、上にも記したように助詞テを介する方法を選んだのである。

～ i 乙(マタハ e 乙)+ te + ari → ～ i 乙(マタハ e 乙)+ $tari$

そして、この結果生まれた助動詞タリの利点は、母音変化型活用動詞連用形にも全く同じ形で接続することができることであった。そのため、アスペクト表現形式の場合は、他のル・ラル(ユ・ラユ)、ス・サス、ウ・ヨウのように母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞とで接続する語形を異とするのではなく、母音変化型活用動詞もやがてりを捨てタリをアスペクト表現形式として後接させるようになったのである。ただし、母音変化型活用動詞の〈接辞類と融合しようとする性質〉は、この後もう一回發揮され、音便形という形でタリとの融合を実現する。

3. 語尾添加型活用動詞連用形になぜ音便形が生じなかったか？

第1節で論じた助動詞ウ・ヨウの問題も、また、前節(第2節)で議論した助動詞リ・タリの問題も、基本的に母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞との間で後接する助動詞の形態になぜ異なりを生じたか、という問題であった。そして、その異なりは、母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞との間で接辞類と融合する性質を持つか否かによって生ずる違いだという見解を示した。動詞連用形に音便形が生まれたか否かも母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞との間で異なりを生じた事象の一つであり、また、当該音便現象は、助詞・助動詞のテヤク(リ)を後接する時にその接合部である動詞活用語尾に生じた音変化の現象であるから、これもまた、母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞との間で接辞類と融合する性質の違いと関わる問題の一つである。

動詞連用形の音便形は、文献上最初から母音変化型活用動詞連用形にのみ現れ、語尾添加型活用動詞連用形には一貫して現れない。ただし、古代日本語においては、母音変化型活用動詞連用形の音便形は原形と共存し、音便化するかしないかは、文体的差異が待遇表現上の差異を反映するものであった。しかし、やがて母音変化型活用動詞連用形はテ・ク(リ)に接続する場合義務的に音便形となり、語尾添加型活用動詞連用形の非音便形と対立する。即ち、活用形としての音便形が確立するのである。

坪井2001では、活用形としての動詞音便形について論じ、母音変化型活用動詞連用形には音便形が生まれ、活用形として定着したのに対し、語尾添加型活用動詞連用形には音便形が生まれなかったことが、両活用型に属する動詞間の形態の示差性を高める役割を果たしたという解釈を示した(同書第Ⅱ部第5章)。同書では、なぜ母音変化型活用動詞連用形の方に音便形が生じ、語尾添加型活用動詞連用形の方に音便形が生じなかったのか、なぜこれが逆の分布にはならなかったのか、に

ついては、次のような記述がなされている。

…上二段活用には活用形としての音便形は生まれなかった。なぜなら、上二段活用は、その語尾添加式活用という型の中で連用形語尾は固定的であったのであり、これをまで音便形に仕立て直してしまったのでは、そもそも音便形確立の意味(形態に示差性の増大)がなくなってしまうからに他ならない。

(p. 85)

上の記述は、当該部分の議論の主旨が四(五)段活用動詞連用形と上二(一)段活用動詞連用形の形態の異なりの持つ意義(形態の示差性)の主張にあったために、四(五)段活用動詞連用形がなぜ音便形をとり、上二(一)段活用動詞連用形のみならず下二(一)段活用動詞連用形も含めてなぜ音便形をとらなかったか、について積極的な説明のかたちをとっていない。

しかし、本稿の考え方によれば、このような音便形の有無の分布になったのも、母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞の性質の違いから生ずる自然な成り行きと言えるのである。〈接辞類と融合しようとする性質〉を持つ母音変化型活用動詞連用形には音便形が定着し、〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉を持つ語尾添加型活用動詞連用形には音便形は定着しなかった。なぜなら、動詞連用形における音便形とは、動詞が後続の辞テ・タ(リ)との接続部の活用語尾を特殊音化することによって後続辞との融合を表示することに他ならないからである。

4. 助動詞ラル(ラユ)・サスなどについて

前節まで、母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞とで接辞類との融合の有無の違いが現れる三つの場合について論じた^{*11}。これらは、いずれも、母音変化型活用動詞が〈接辞類と融合しようとする性質〉を持ち、語尾添加型活用動詞が〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉を持つという考え方で説明できた。しかし、接辞類との接続の仕方が母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞とで異なる場合の全てが、この両活用型の性質の違いで説明できるわけではない。

日本語助動詞には、意志・推量の助動詞ウ・ヨウの他にも、接続する動詞によって形態を異にするものがある。自発・受動(・可能・尊敬)の助動詞レル・ラレル(ユ・ラユ、ル・ラル)、使役(・尊敬)の助動詞セル・サセル(ス・サス)は、いずれも母音変化型活用動詞に接続する場合と語尾添加型活用動詞に接続する場合とで形態

を異にするケースである。同様のケースは上掲のもの他に室町期の尊敬の助動詞シモ・サシモ(シム・サシム)を挙げることができる*12。意志・推量の助動詞ウからヨウが分出する経緯は第1節で見たが、自発・受動の助動詞ル・ラル(ユ・ラユ)、使役の助動詞ス・サスにおける形態の分布をウ・ヨウと同様の流れで説明することは、現時点では難しいようである。

語尾添加型活用動詞に接続する場合の語形ラル(ラユ)・サスの〈ラ〉〈サ〉が何であるかは諸家によって様々な捉え方がされている。〈ラ〉〈サ〉ないしそれぞれの子音 r・s は挿入された要素であるとする考え方がある(大野1955、川端1997など)。また、柳田1993のように、サスを、サ行四段活用動詞に使役のスが付いたものを異分析した結果生まれたもの、ラル(ラユ)を、単音節下二段動詞にル(ユ)が付く場合に動詞語幹を保持するために生まれたものとする考え方もある。さらに、小松1999のように疑似五段活用動詞活用語尾と解釈する考え方もある。これらの考え方の中には、そこで生まれた形がなぜ語尾添加型活用動詞全般に広まったかについて、助動詞ヨウの議論の際に考えたように、語尾添加型活用動詞の〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉の現れとして解釈するに都合の良い考え方もないわけではない。しかし、この問題は、第1節から第3節にとりあげた問題と違って、時代的にも文献上の例証を求めにくく、そもその語源に関する想定や形態変化の過程に関する多くの仮想を必要とする領域なので、本稿としては、本稿の主題への無理な引きつけを避けて問題として留保しておきたいと考える。

なお、室町期の尊敬の助動詞シモ・サシモ(シム・サシム)における母音変化型活用動詞に接続する場合と語尾添加型活用動詞に接続する場合との語形の違いは、その語源(ないし、語源として結びつけられて考えられていた)「セ給ウ・サセ給ウ」を継承するものと考えられるが*13、これについても詳しい考察は本稿では控えることとする。

5. まとめ

以上、本稿では、古代から近代に至る日本語史上で、従来別個な出来事と論じられてきた三つの事象について、母音変化型活用動詞の〈接辞類と融合しようとする性質〉と、語尾添加型活用動詞の〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉が働いているという観点から検討を加えた。その結果、かかる動詞活用型の性質の違いを前提とすると、それぞれの事象の変化の筋道がより納得しやすくなるということを示した。このことはかかる動詞活用型の性質の違いが存在する

ことを直ちに実証したとは言えないにしても、少なくともかかる観点から、様々な日本語史上の出来事について検討を加えてみることの有効性は示し得たと考える。

ただし、最後に確認しておかなければならないことがある。それは、本稿でとりあげた事象は、いずれも動詞未然形か連用形の語形・接続に関わる事象ばかりであることである。実は、語尾添加型活用動詞の〈接辞類と融合せず、自らの語形を固定化しようとする性質〉といっても、その性質が発現されて母音変化型活用動詞との間に〈融合〉の有無に関して違いを生ずるのは、もっぱら未然形・連用形であり、接辞類との間に〈添加語尾〉のル・レを介する連体形(終止連体形)・已然形(仮定形)では母音変化型活用動詞との間に違いを生ずることはないのである。そして、例えば、現代語において、いわゆる仮定形は「書けば→書きゃ(ー)」のような一種の〈融合〉を起こすが、このような〈融合〉は「起きりゃ(ー)、受けりゃ(ー)」のように語尾添加型活用動詞の語尾の「レ+バ」にも生じている。したがって、厳密に言えば、語尾添加型活用の〈自らの語形を固定化しようとする性質〉とは〈添加語尾〉のル・レを除いた部分の性質と言うべきであろう。

さて、そこで翻って考えてみるに、終止形連体形の合流・二段活用の一段化を経て、母音変化型活用と語尾添加型活用に両極化していく日本語活用体系の変遷自体が、語尾添加型活用にとっては、二段活用(混合変化型活用)という母音変化を含む中途半端な活用を捨てて「自らの語形を固定化する」方向への変遷であったとすることができる。そして、本稿でとりあげた事象は、それぞれの時代に動詞と接辞類との間で生じた接続に関わる「あつれき」が、活用体系自身が流れ行こうとする方向に沿って具体的に処理されていく姿であったと断言していいのである。

注

- *1 本稿で言う〈接辞類〉とは、いわゆる補助用言や助詞・助動詞の類を指す。要するに動詞に後接して文法的意義を付加する要素である。〈類〉とするのは曖昧な規定であるが、本稿は助動詞自身の成立過程をも通時的考察の対象とするものであるし、品詞論的にはその所属に議論のあるものも扱うので、あえて厳密な規定は避けておきたい。本稿で論ずるa～cの問題で扱う具体的な〈接辞類〉は、アスペクト表現形式としてのアリ(補助用言?)、助動詞リ・タリ、助詞テ、助動詞ウ・ヨウ、などである。

- *2 本稿で言う〈融合〉とは、動詞と後接する接辞類との境界部に音転化や音脱落などが起こり、両者の本来の境界を形態的に“破壊”することによって、両者の文法上の“結び付き”を明示することである。これも曖昧な規定ではあるが、むしろ、その方が言語変化の柔軟性を把握できる面があると考え、この語を用いることとする。
- *3 変格活用動詞については本稿の考察対象外とする。
- *4 本稿での助動詞類の呼称は、いわゆる学校文法の呼称に従う。学校文法での助動詞の規定や呼称に文法論上の議論が存することは承知しているが、本稿の論旨にとっては余り問題ではないので一般的な呼称に従う。
- *5 先行研究の所説は、此島1973(p. 400～401)にまとめられている。
- *6 この間の形態変化の実例は福島1969に詳しい。
- *7 中世東国方言のヨウについては夙に外山1961の報告がある。
- *8 先行研究では、リとタリとの間には明確な意味・用法の差は見られないとして、両者を一括して扱うのが一般的である。

鈴木1992では「…～タリ形と～リ形は、接続する動詞の活用が違うだけで、テンス・アスペクトの意味は違わないと思われる。～リ形がいわゆる完了を表す形態論的な語形として確立するに及んで、その形をとる動詞に活用の種類上の制限があって、すべての動詞の形態となりえないことが、形態論的な語形としてふさわしくないの、それを補うものとして発生したのが～タリ形であると考えられるからである。従って、特に区別せず、～タリ・リ形としてまとめて扱う。接続の問題以外に、～リ形は実際には、ほとんどが「～給へり」の形で用いられるという特徴があるが、これは、一人称が主体となることはまずないという結果はもたらずが、テンス・アスペクトの意味の違いには影響はないと思われる」(p. 10)と言っている。

野村1994では「上代リ・タリは一括して存続・完了の助動詞として取り扱われることが多い。結論的には、本稿も両者を一括するわけではあるが、まずその取り扱いが適当であるかどうか、一応検討しておきたい」(p. 28)として検討を加えた後、「以上のように上代のリとタリの間には、有意と言えるほどの意味・文法上の差異は認められないように思われる。よって以下の論点においては、リ・タリを一括して取り扱うこととする」(p. 31)としている。

また、釘貫1999でも「タリと非常に類似した意味を有するのが完了辞である。後述するようにリはその意味だけでなく出現分布の在り方もタリとの類似性が強い」(p. 4)として両者の類似性を強調している。

ただし、平安時代の完了の助動詞りは、文献によっては、タリに対してある種の役割分担を持っていた点が認められる場合がある。『古今和歌集』その他の歌集の詞書きにおける「詠めり(…とて詠める、など)」の多用や、『土左日記』に典型的に現れる

(本文)…とて詠めり(…詠める、…詠める歌、など)、
(和歌)…

(本文)と詠めり(と言へり、など)。…

という、「詠めり、言へり」によるサンドイッチ形式で和歌を記載する固定的な様式などに、「和歌表示」という書記スタイル上の一種の役割を担っている面があると考えられる。この場合「詠む」という動詞にはどんな文脈でも決まってタリでなくリが付くというわけではない。『土左日記』でも会話部分では「そもそもいかが詠むだる」（正月七日の条）という例が見られ、実際の口頭言語ではタリの使用が優勢だったのではないかと思わせる。

- *9 上代にはりと同じように主に四段動詞中心に接続し、平安時代以降衰滅する、上代特有の助動詞ないし接尾辞として扱われる、尊敬の四段活用型スや継続のフがある。これらを同類と考えるならば、むしろりは衰滅が遅れた語と言うこともできる。しかし、リは平安時代にも助動詞としての生命力をなお保つが、一方でス・フが幾つかの語に接尾辞として後世まで生き残るのに対して、リはそのような接尾辞として生き残れなかったという相違点もある。
- *10 実際、後世の文語文においては、諸家が指摘するとおり次のような類推形を生んでいる。

一樓の明月に雨はじめて晴れり（謡曲「羽衣」）

ただし、これらは既に「生きた」言語使用ではなく、古語に対する知識不足のための逸脱である。

- *11 この中、助動詞リ・タリについては、最終的に全ての活用型動詞にタリが付くこととなって、母音変化型活用動詞と語尾添加型活用動詞とで助動詞の語形そのものに違いはなくなっている。
- *12 この他、使役の助動詞シムが、サシムの形をとることが平安時代以後後世になるほど見られるが、これは、
母音変化型活用動詞に接続する場合＝シム
語尾添加型活用動詞に接続する場合＝サシム
というはっきりした分布を示さないまま終わったようである。
- *13 湯沢 1955、大塚 1996 参照。

参考文献

- 大塚光信 1996 『抄物キリシタン資料私注』清文堂
大野晋 1955 「万葉時代の音韻」『万葉集大成』6 平凡社
川端善明 1997 『活用の研究』Ⅱ増補再版 清文堂
釘貫亨 1999 「完了辞り、タリと断定辞ナリの成立」『万葉』第170号
此島正年 1973 『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社
小松英雄 1999 『日本語はなぜ変化するか【母語としての日本語の歴史】』笠間書院
鈴木泰 1992 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房
坪井美樹 2001 『日本語活用体系の変遷』笠間書院
外山映次 1961 「洞門抄物に見える助動詞「ヨウ」について」『国語学』第46集
野村剛史 1994 「上代語のり・タリについて」『国語国文』第63巻1号(713号)
福島邦道 1969 「「見ゅう」と「見よう」の交替」『佐伯梅友博士古稀記念 国語学論集』
表現社
柳田征司 1993 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
湯沢幸吉郎 1955 『室町時代言語の研究』風間書房
『岩波古語辞典』基本助動詞解説
『時代別国語辞典上代篇』上代語概説

つばい よしき／文芸・言語学系教授
(2002年7月15日 受理)